

実践報告

フィールドワークを活用した 英語実践能力の養成とその意義

— UC 実習型・夏季短期派遣プログラムの実践記録から

西川 美香子

要 旨

「UC 実習型・夏季短期派遣プログラム」は京都大学において平成 23 年度より開始した新しいタイプの短期派遣留学プログラムである。本プログラムの特徴は工学・農学・経営管理の三分野を基盤とする分野横断型の語学研修とキャンパス外でのフィールドワークを組み合わせ、実践的な英語運用能力のみならず国際性や行動力（交渉力、協調性、リーダーシップ）をも養成しようとする点にある。本稿では、「UC 実習型・夏季短期プログラム」について企画の背景、プログラムの立案過程、実施状況、今後の課題について報告すると共に、本プログラムの核心部分であるフィールドワークと英語実践能力の関係について論じる。

【キーワード】短期留学、分野横断型、フィールドワーク

1. はじめに：学部生の内向き志向と短期派遣プログラムを通じた留学促進の取り組みについて

京都大学では、近年の留学希望者の減少傾向 [1] ⁽¹⁾ に歯止めをかけるため、様々な取り組みを行っている。国際交流推進機構が中心となり、海外留学推進のために企画および実施された短期派遣プログラムには、国際交流科目や中国での中国語・中国文化研修、昨年度から始まった豪州英語研修プログラム（学部生を対象とした英語コミュニケーション・プログラム（文系・理系別））等がある。平成 22 年度 9 月以降、日本国内の大学等の高等教育機関において短期派遣プログラムの拡充に向けた動きが一気に加速し始めた。その端緒となったのは文部科学省における平成 23 年度予算の概算要求に関する報道である。文部科学省は海外留学に対して消極的といわれる若者の「内向き志向」打開策として、平成 23 年度予算の概算要求に留学生の受入れ、派遣の費用（それぞれ 7000 人分の奨学金）として 17 億円を盛り込むことを決定した。これは、日本の大学、短期大学、高等専門学校が実施する超短期留学（3 カ月未満）の派遣プログラムに参加する学生を対象とする奨学金であり、月額一人当たり 80,000 円が日本学生支援機構（JASSO）により支給されるものである。奨学金支給の対象となるプログラムは、「派遣計画の実施・管理体制」、「学生の募集・選考基準」、「教育・指導体制」について一定の基準を満たさなければならないことが応募要領に記載されている（参考資料（1））。採択にあたり必須とされてはいなかったものの、本学ではプログラムの質を保証するという観点より短期プログラムを単位認定することが望ましいという方針が打ち出された。

その条件を満たすために、プログラムの内容に関する企画に加え、各部局における既存のカリキュラムとの整合性を持たせるために周到な準備を進めることとなった。この新しい奨学金制度に可能な限り多くのプログラムの申請を促すため、本学では研究国際部留学生課および国際交流委員会などを通じ、全部局に奨学金申請応募の通知を行った。平成23年度の第1次募集では17件の留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）の応募があり、その結果、15件が採択された。この奨学金の採択プログラムの一つに、本年度、新規に企画され実施した「UC 実習型・夏季短期派遣プログラム」がある。本稿では、「UC 実習型・夏季短期プログラム」の特徴である「フィールドワーク」と「分野横断型の語学研修」の融合が、英語実践能力の向上にどのような効果をもたらしたのかについて、現地視察による調査結果を報告する。

2. UC 実習型・夏季短期派遣プログラムの企画立案から実施について

本プログラムの立案は平成22年度9月に発足した短期留学プログラム企画の意見交換会から始まった。奨学金申請書において我々⁽²⁾が示したプログラムの目的は、“グローバル社会で実際に活躍できる人材、海外でリーダーシップを発揮できる人材を養成する”ことである。新しいプログラムの立案はこれに従って行われた。平成23年2月～3月に実施が決まっていた豪州英語研修プログラムとの違いを明確にするために、本プログラムでは対象者を3年生以上の学部生および修士課程の大学院生とした。上級生が英語圏で短期留学をする目的として主に挙げているのは、(1) 語学の習得に加え、(2) 就職活動において有利となるインターンシップなどの就労体験、もしくは(3) 自分の研究分野に近い分野での課外研修を行うフィールド型実習などである(参考資料(2))。これらのニーズを反映したプログラムを企画することになった。

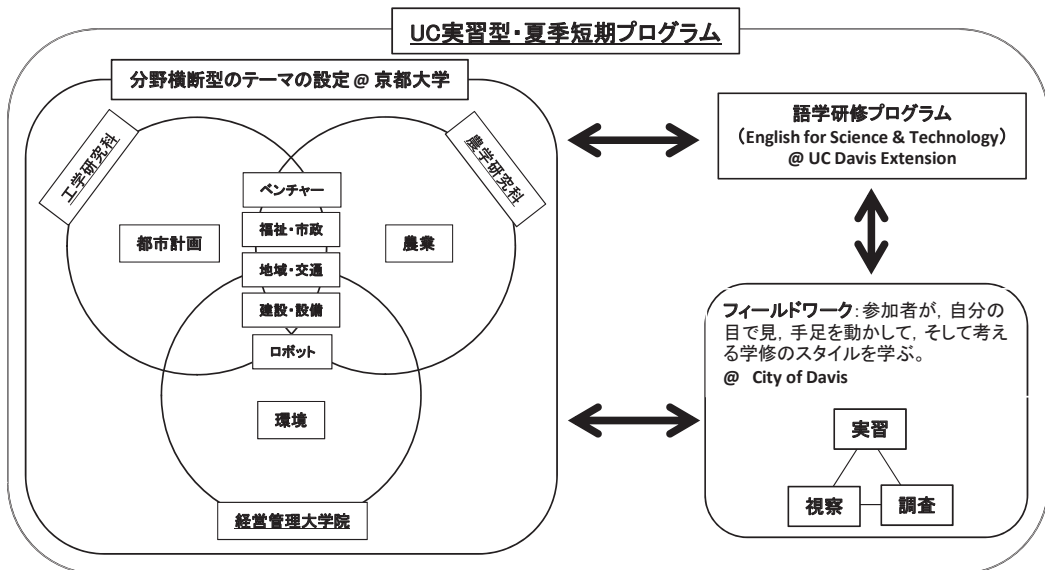
2.1 具体的な分野の設定と単位認定に向けた調整

本プログラムでは、工学・農学・経営管理の三分野からなる分野横断型の語学研修とキャンパス外での研修（以下、フィールドワークとする）から成る海外研修プログラムを企画した。実施時期は平成23年8月15日から9月2日までの3週間である。京都大学とも交流の深いカリフォルニア大学デービス校（以下、UCデービスとする）エクステンションが我々の要望に応じ、既存の語学プログラムを元に作成した新たな研修プログラムを提供した。

デービス市は人口6万人程度と小規模な都市でありながら、教育文化水準が高く、持続可能な社会（サステイナビリティの達成）の実現を目指し、環境問題や自然エネルギーへの関心が高いことで知られる。また、UCデービス校は農学校として設立された総合大学であり、農学、環境、医学の分野においてアメリカの大学でも屈指の存在である（[2]、参考資料(3)）。

プログラムにおいて取り扱う分野については、デービス市の特徴を活かし、コアとなる分野を「農業」、「環境」「都市計画」とした。更にホットトピックス（アカデミック英語のクラスで扱う科学技術系トピックスのこと）を1) 福祉・市政 2) 地域・交通 3) 設備・再生エネルギーに絞り、これら3つのトピックについて分野横断型の講義を実施することになった（図1参照）。

図1 分野横断型の語学研修とキャンパス外での研修から構成される海外研修プログラムの提案スキーム
(下図は JASSO ショートビジットプログラム奨学金(平成23年度)の申請に際し、筆者が作成したものを参考に再構成した。)



キャンパス外で実施する課外研修（フィールドワーク）については、これら三つのトピックに対応させるように12トピック（表1）を提案した⁽³⁾。

表1 Davis の特色を活かしたフィールドワークのテーマ（提案）

1. Marshland Ecology and Preservation	湿地帯の生態学と保存
2. Davis Food Co-op	有機農産物・エコ商品市場
3. Enology & Viticulture and Beer Brewing	ビール・ワインなど酒発醸造
4. Entrepreneurship and New Venture Development	起業と新しいベンチャーの開発
5. Housing and Real Estate Market	住宅と不動産市場
6. Design Strategy and Innovation	デザイン戦略と新製品の開発
7. Public Elementary Schools	公立小学校の特色
8. Immigration Workers	農行従事移民と福祉
9. Space Science	宇宙科学と機械工学
10. Renewable Energy and Passive Solar Houses	再生エネルギーと環境に優しい家
11. Facility Design and Construction	建築の設備関係
12. Bike Lane Planning	環境に優しい街づくり・自転車専用レーン

本プログラムでは、学生は週に1度、三か所においてフィールドワークに参加することになった。学生は、表1に掲載のテーマより第一候補、第二候補を選択し、4名程度で構成されるグループを編成し、フィールドワーク調査に参加した。フィールドワークを通してテーマについて情報収集、ディスカッションを行い、その成果をグループごとにまとめた後、プレゼンテーションを行った。フィールドワークに取り組むにあたり、学生には語学力、交渉力、協調性、リーダーシップ、問題提起の力を総合的に発揮することが要求された。このように、学生の短期留学に求めるニーズ

と学生が学ぶべき事 [1] の双方を組みこんだフィールド型実習を企画した。

また、本プログラムのもう一つの特徴は本学の教育カリキュラムに組み込むことにより履修科目（単位取得が可能）とした点である。本学における既存の教育課程と連携し、その一部となることにより単位取得を可能とした。具体的には、(1) 専門科目・インターンシップまたは学外実習（工学）、(2) 共通専門科目・特別実施研修（農学）、(3) 海外プロジェクトマネジメントセミナー（経営管理大学院）として、プログラム参加者に履修単位を認定することとなった。

このような経緯から、本プログラムに関係する部局の担当教員による事前準備講義が提供された（[参考資料 1]）。さらに、研修内容の専門性を考慮して、プログラムへの参加対象となる学生を以下の条件を満たす者に限定した。①工学部/工学研究科、農学部/農学研究科および経営管理大学院の在籍者であること、②各部局で認めている科目の履修者もしくは該当部局において学科・専攻の担当教官より推薦を受けた者。なお、平成 23 年度 8 月に実施した第 1 回プログラムへの参加者数は 22 名（内、2 名は学部 2 年生）であった。

表 2 平成 23 年度・第 1 回 UC 実習型・夏季短期プログラム参加者

所属研究科・学部	学生数
経営管理教育部	3
工学部	8
農学研究科	1
農学部	10

2.2 UC 実習型・夏季短期派遣プログラムの概要

本プログラムは次に示すプロセスに沿って企画された。まず、本学においてプログラムの基本設計（図 1）と履修内容の概要（2-1 を参照）を決定した。次に、UC デービスエクステンションにおいてこのアウトラインに沿ったプログラムの詳細およびスケジュールを企画した。この京都大学向けに新たに企画された UC 実習型・夏季短期プログラムの正式名称は「English for Science and Technology Interdisciplinary Research Program」である。本プログラムは学生のアカデミック英語能力を伸ばす目的で企画され、(1)「ホットトピックス」、(2)「プログラム講義」、(3)「分野横断型研究プロジェクト」、(4)「リスニングと発音」の四つの授業と、これにリンクしたキャンパス外での研修（フィールドワーク）から構成される。

本プログラムの成否の鍵を握る部分はフィールドワークなどの学外実習である。フィールドワークの事前準備は UC デービスエクステンションが担当した。企画書によると、1 グループあたり 3 か所（一日のスケジュールの内、数時間で実施する）で行われることになっていた。分野の異なる 6 グループ分のフィールドワーク先（合計 18 か所）に加え、プログラム講義の課外授業先（週 1 か所 × 3 週 = 3 か所）、合計 21 か所の学生受入れ先の調整がなされた。学内で行われるプログラムの授業と学外で取り扱われるトピックとの整合性を保ち、また地理的に広範囲に点在したフィールドワーク調査先で限られたスケジュール内に活動するスケジュールの調整、そしてそれらの交通手段をアレンジすることは非常に多くの労力を必要としたはずである。UC デービスエクステンションのスタッフの尽力により、当初の計画通りに研修先の確保、講義の準備が行われた。

筆者は京都大学側の担当者としてこのプログラムの企画に携わり、UC デービス側の担当者と共にプログラムの調整および実施に携わった。筆者はプログラムの実施期間中（平成 23 年 8 月 15

日～9月2日)の第二週目に現地視察を行った。その目的は、本プログラムの実施が参加学生の英語実践能力の向上に果たす役割を調査することであった。特に、「フィールドワーク」と「分野横断型の語学研修」が英語実践能力の向上に及ぼす効果に着目して調査を進めた。この視察調査で得た知見を基に、本プログラムの特徴について以下の三項目について報告する。

2.2.1 本プログラムにおける語学研修の特徴 I

——科学技術系トピックスを活用した講義（ホットトピックス）による基礎力の養成

本項では、アカデミック英語の基礎力（語彙力、読解力、文章作成力）の養成を行うために本プログラムで実施した講義について紹介する。まず、参加学生の英語運用能力について述べる。本プログラムへの参加学生には事前に英語運用能力テストのスコアの提示もしくは学内で実施された IELTS (International English Language Testing System) の受験を義務づけた⁽⁴⁾。プログラムで推奨されている英語運用能力テストのスコアは IELTS 6.0 (TOEFL iBT 80) である。平成 23 年 6 月 24 日に実施した IELTS では、参加者の平均スコアはややそれを下回った (平均点 IELTS 5.8、TOEFL iBT 換算で 76 程度)。海外留学の経験の有無については、短期留学を含めて経験を有する学生が数名いたものの、海外留学が初めてという学生が大半を占めた。UC デービスエクステンションでは、彼らの語学能力を考慮した上で、基礎力を養成するために科学技術系トピックに特化した授業（リーディング）を開講した（週に 4 回）。雑誌記事、科学技術論文、書籍などにおける文章で頻出する語彙や基礎的な専門用語を正しく理解させるだけでなく、エッセイ作成時に学んだ語彙や表現を応用する訓練が行われた。基礎を養成するためのトレーニングとして、語彙力をつけるためのテスト（単語の意味を英語で説明する（記述））がほぼ毎回行われた。本プログラムの参加者は 2 グループに分かれ、ホットトピックスに関する講義を受講した。ここで扱われた読み物は参加グループのテーマ（工学系・農学系・経営系）を意識したもので、グループ間（表 4 参照：Green Group（工学・農学）と Orange Group（工学・経営））で、内容の少し異なる授業が行われた。

2.2.2 本プログラムにおける語学研修の特徴 II

——分野横断型講義の設置による実践的な英語力の養成

本項では、研究および調査活動で必要とされる英語力（文献からの情報収集・調査内容の設定・インタビューによる調査活動）を養成するために設置した“分野横断型講義”の実施について述べる。分野横断型の講義の概要を表 3 に示す。本プログラムにおける分野横断型講義とは、環境・農業・都市計画の異なる三つの専門分野より二分野を組み合わせて作成したテーマに基づく講義である。例えば、“建築と再生エネルギー（表 3(c)）”というテーマの場合、都市計画と環境の分野横断型テーマである。この講義の意義は、自分の専門分野の以外の知識やものの考え方を他の専門分野のトピックス（あるいはその分野の教員や学生）から学ぶことにある。この講義は、全員参加型（グループ分けがない）の講義として週に一度学外において開講された。

表3 分野横断型講義のテーマと実施場所

テーマ	実施場所
(a) 福祉と行政	Davis Community Clinic
(b) 地域と交通	City of Davis Community Planning and Transportation
(c) 建築と再生エネルギー	Lawrence Berkeley National Laboratory at UC Berkeley

本講義では、その分野の専門家がそれぞれのテーマについて講義を行った。講義の構成については、カリフォルニア州と日本が抱える問題にどのような共通点や相違点があるかについて学生に問題提起する形式をとった。分野横断型講義に参加するに当たり、学生はUCデービスエクステンションのキャンパスにおいて事前講義（Pre-Program Lecture）を受講する。その際、与えられたキーワードを手掛かりに関連文献より情報収集を行い、実際の分野横断型講義で聞いてみたい具体的な質問（調査のための質問）を事前に準備した。分野横断型講義の後には、Post-Program Lecture（事後講義）が開講され、レクチャー内容についてレポート作成を行った。

2.2.3 本プログラムにおける語学研修の特徴 Ⅲ

——フィールドワークを通じて実践的な英語力を養成する

次に、実践的な英語力の養成を行うため本プログラムの核心部分として設置した“分野横断型研究プロジェクト”について紹介する。第2節（2.2）の冒頭で紹介した本プログラムを構成する4つの授業のうち、最も重点を置いたのがこの“分野横断型研究プロジェクト”である。この授業は、学生の興味を反映した様々なテーマ（表4）についてインターネットや図書館などの施設を利用した情報収集、参加者が現地の研究者と共に自然や現場の中に足を運び、班ごとにその日の活動報告を行い、活発に議論をしながら、調査結果を分析しまとめて、最終日には各班で調査結果をまとめ、発表会を行う。本プロジェクトにおけるフィールドワークとは、参加者が、自分の目で観察し、手足を動かして、そして考える学修のスタイルを学ぶことを目的としている。

本年度の参加者は22名であったため、表4に示した6分野についてフィールドワークが実施された。フィールドワークへの参加は小グループ（3名～5名の学生で構成）の単位で行われた。また、グループ毎にUCデービスエクステンションからプログラムリーダーもしくは学生（Site-Visit Leader）が派遣され、プログラム参加者をフィールドワークの実施場所に引率すると共に、学生の質問の補助や現地での活動における交渉を支援した。

表4 学生が選択したテーマ、所属グループ（2.2.1項参照）

テーマ	所属グループ	参加人数
1. Marshland Ecology and Preservation	(Green Group) 湿地帯の生態学と保存	3名
2. Sustainable Food and Davis Food Co-op	(Orange Group) 有機農産物・エコ商品市場	3名
3. Entrepreneurship and New Venture Development	(Orange Group) 起業家精神と新規ベンチャーの発展	3名
4. Space Science	(Green Group) 宇宙科学と機械工学	5名
5. Renewable Energy and Passive Solar Houses	(Green Group) 再生エネルギーと環境に優しい家	3名
6. Bike Lane Planning	(Orange Group) 環境に優しい街づくり・自転車専用レーン	5名

フィールドワークで学んだ成果を研究レポートとして報告（プレゼンテーション）するために様々な指導が行われた。具体的には、発表内容を項目ごとにまとめる、発表のアウトラインの作成など、発表内容を聴衆に対し簡潔に分かりやすくプレゼンテーションするための方法について、グループ毎に指導された。さらに、“リスニングと発音”の授業が“分野横断型研究プロジェクト”を補完するために実施された。ここでは、英語の発音の仕組みについて学習すると共に、口頭によるプレゼンテーションの練習などが行われた。学生の評価基準は議論への参加の程度に基づいている（参考資料(4)）。

以上に示したように、本プログラムでは参加者が各々の選択テーマに沿ったフィールドワークを通して、研究課題をとりまとめていく学習スタイルを採用することで、語彙力、情報収集力（読解力、聞き取り能力）、文章作成能力、情報発信力など総合的なアカデミック英語能力を養成できるようにした。こうした学習スタイルは、座学中心の従来型の語学研修では見られない新しい手法である [1]。筆者は、本プログラムを通じて、語学力（読解力、聞き取り能力、文章作成能力、プレゼンテーション能力）、行動力（他者とのコミュニケーションを通じて必要な情報やリソースを獲得する）、実践力（調査研究の進め方を考え、実施し、成果を発信する一連のプロセスを完遂する）の3つの力を統合的に養成することが可能となると期待している。

3. 第一回 UC 実習型・夏季短期プログラムを実施して——実践的英語能力の養成と人材養成の点からの考察

本章では、第一回 UC 実習型・夏季短期プログラムの実施報告を元に、本プログラムの特徴である「分野横断型のトピックスを用いた語学研修（基礎レベル）」と「フィールドワークを活用した分野横断型研究プロジェクト（発展レベル）」の融合が英語実践能力の向上に寄与し得ることを述べる。加えて、本プログラムの目的である「グローバル社会で実際に活躍できる人材」、「海外でリーダーシップを発揮できる人材」の養成においてどのような意味を持つのかについても言及する。まず、(1) 担当教員による現地での視察調査報告、(2) 参加学生の報告書、(3) プログラムの担当講師からのコメントを紹介し、これに基づき本プログラムが実践的英語能力の養成と人材育成の両面において有用であることを論じる。

3.1 現地視察調査報告より

本プログラムの実施期間中（平成23年8月15日から9月2日）に筆者を含む二名の教員がUCデービスエクステンションを訪問しプログラムの実施内容について視察および調査を行った。まず、第一週目の後半から第2週目の前半にかけて、榎木哲夫教授⁽⁵⁾が現地に赴き、学内における授業の様子や、キャンパス外でのフィールドワークを視察した [3]。榎木教授が現地視察において着目したのは学習姿勢の変化とソーシャル・スキルの強化である。学習姿勢については、学生が能動的に講義に取り組む姿勢に注目した。学生が講義で与えられるキーワードを出来る限り記録する姿勢は日本ではあまり見られない。言語面での不利をなんとか克服し講義を理解しようとする姿勢が、キーワードの出来得る限りの記録とこれに基づく講義の再構成による学習を促している指摘している。また、フィールドワークに関してソーシャル・スキルの強化との関係を示唆している。フィールドワークは小人数のグループ単位で活動するように企画されており、単独では何もできない。学生間の能動的なコミュニケーション（何を調査するのか、どのように調査するのか、

何が明らかになったのかについて共通認識を持つ)が必要である。中でも、“聞くこと”は学内での授業やフィールドワークに限らず、滞在中の様々な局面で必要とされる。この“聞くこと”が自分の意欲を相手に伝えるために必須かつ共通の“ソーシャル・スキル”であることを指摘している。今回の現地視察を経て、榎本教授は本プログラムの役割として実践的な英語能力の養成だけでなく、“グローバル人材”として必要な能力(俯瞰力、国際性、創造力、構想力、行動力)の養成にもつながるものと期待している。

引き続き、第二週目より筆者も現地視察調査を開始した。筆者はプログラムの実施・管理体制、授業の実施状況やプログラム内容について調査を行った[4]。まず、筆者が注目したのは学生の学習理解度である。筆者は本プログラムの事前準備プログラムの講義(合計6回)を英語のみを使用して実施しており、そのときの学生の学習理解度(発言における英語のレベルが主である)を現場で把握していた。さらに、プログラム参加に際して受検させたIELTSのスコアより参加学生の英語能力を評価していた(2.2.1参照)。この経験に基づき、定性的ではあるものの参加学生の英語運用能力を基準(IELTSスコア5.8相当)にした場合、本プログラムにおいて求められる英語の難易度および授業内容の難易度はやや高めであると評価した。それを示唆する学生の学習態度を現地において確認することができた。プログラムの第一週目は、学生の多くが放課後も予習、復習にかなりの時間を費やしていた。授業時間中においても、不明な単語が出てくると逐次それを電子辞書で確認していた。次第に、学生側から講師に対して不明な単語を質問するなどの学習態度の変化が現れ、不明な英単語の意味を英語で平易に説明してもらうことを繰り返すうちに理解できるようになっていくのを確認した。しかし、それを実践力として応用するレベルにはまだ到達できていないことも確認できた。例えば、学生と講師の間で能動的な質問やコメントのやり取りが交わされることはほとんどなかった。また、参加学生の英語レベルは課外実習先へのコンタクト(相手に自分たちの訪問の主旨を伝えてアポイントをとる)といった事ができるほどではなかったため、交通手段から行き先まで全てがアレンジされた状態で課外実習を実施した。それでもなお、事前に準備した質問に対して想定外の内容を含む回答があった場合は、理解が出来ない学生が少なからずいた。語学レベルの向上には時間がかかることは自明であり、本プログラムの参加がそれを顕著に短縮することはない。むしろ、このプログラムをきっかけにして継続的な学習を続けることが学生に求められると共に、教員がこうした継続学習に寄与するような語学科目を企画し、履修できるように環境を整える必要があると筆者は考えた。

次に、筆者は「分野横断型のトピックスを用いた語学研修」が「分野横断型研究プロジェクト」の遂行に効果的であることを現地で確認した。プロジェクト研究を遂行するという明確な目的があるために、複数の分野に渡る専門語彙の学習や、アカデミック英語に共通の文章表現を学ぶことに意義がある。最後に、筆者は本プログラムがアカデミック英語能力の養成だけのものではないことを現地視察で確認した。それは、本プログラムへの参加がコミュニケーション能力の強化につながり得るという点である。それが顕著に見られたのは分野横断型研究プロジェクトにおいてである。このプロジェクトでは、グループでフィールドワークにおける調査活動を行った後、得られた情報をとりまとめ、論点や結論について議論を重ね、プレゼンテーションに向け準備を進める。この一連のプロセスにおいて多くのコミュニケーションが学生間、学生-教員間で交わされた。本プログラムが単なる語学研修ではなく、英語をツールとして用いるコミュニケーションの実践力を養う機会も与えていることを実際に確認することができた。

3.2 学生からの報告

本プログラムの参加者 22 名はこれらの一連のプログラムへの参加を通じて何を身につけたと体感することができたのであろうか。

能力	コメント
国際性	・今までに<u>学んできた知識・経験を共有することの大切さ</u>を改めて感じさせられた。日常生活から、自らが専攻する専門領域に関してまで、持っている知識をお互いに伝え合うことで、国際的な理解が深まると実感したと同時に、<u>コミュニケーションするための英語の必要性を再確認</u>させられるものであった。(経営管理大学院 1 年) ・このプログラムを通じて、<u>英語で物事を発表する</u>という貴重な経験を積むことができ、<u>海外に対する関心がさらに深まった</u>。(工学部 3 年生)
創造力・構想力	・プレゼンテーションはどのグループも成功に終わりました。問題としては、3 週間のプレゼンテーションを 20 分にまとめるのが非常に困難であったことでしょうか。私たちのチームは 20 分にまとめるために多くのトピックを削りました。ですが、最重要ポイントを分かりやすくまとめ、発表するという<u>プレゼンの最も大切なスキル</u>もこれによって磨かれました。(農学部 3 年生) ・私たちはサイトビジット以外でも<u>常にともに行動し</u>、自分たちのプレゼンに対して<u>徹底的に議論を重ねた</u>バックグラウンドや背景知識や考え、聞き取った内容に違いがあり、プレゼンで一つの主張を作るのに非常に苦労をした。議論が感情的になったり、疲労や焦りから口論寸前になることもあったが、これらを乗り越えたからこそ、最終プレゼンは<u>自信を持って行うことができた</u>。(農学部 4 年生)
行動力・団結力	・リサーチプロジェクトに関しては難しいテーマで発表の形にまとめるのは大変だったが、実際にベンチャー起業やビジネススクールを訪問して得られた経験はメンバーそれぞれに大きな影響を与えた。全体として素晴らしい<u>メンバーに恵まれたことが</u>今回の留学の成功の大きな要因だった。(経営管理大学院 2 年生) ・<u>グループワークを通して</u>お互いの意見を尊重しながら<u>物事を進められたことは非常に良かった</u>と思う。今後もこのような共同研究の際には、今回の経験を生かして、<u>互いの力を集結させて良い成果を作り上げられるように</u>できればと思う。(経営管理大学院 2 年生)

本プログラムの参加学生には報告書の作成と提出を義務付けた。帰国後に提出された報告書の中から、学生リーダー（6 名）の本プログラムに対する感想を抜粋した。この報告書とは別途、UC デービスエクステンションと共同で、プログラムに関するアンケート調査を実施した。しかし、現地でのアンケートは i) 十分な時間が与えられなかったということ、ii) アンケートが記述式のもので、英語で答えなければならなかった事情より、参加者の体験の詳細を知り得る材料とはならなかった。学生からのコメントを集約すると、本プログラムが単なる語学研修ではなく、学外でのフィールドワークを通して国際性、創造力、構想力、行動力、団結力などの実践力を養う機会であるとしてとらえて行動していたことが十分に窺えた（コメント内の波線部分）[4]。

3.3 本プログラムに対する講師からのフィードバック

先の 3.1 節、3.2 節ではプログラム派遣元の側からの視点で本プログラムについて述べてきた。本節では、プログラムの受入れ先である UC デービスエクステンション側の視点で本プログラムをどのようにとらえているのかについて述べる。特に、UC デービスエクステンションにとっても初めての試みとなった分野横断型研究プロジェクトについて、担当講師よりコメントを得た [5]。質問内容は以下の三点である。1) 学生の英語能力（英語運用能力およびクラスへの理解度）、2)

フィールドワークにおける改善点、3) 分野横断型研究プロジェクトの重要性。特に、英語能力（の養成）に関するコメントを以下にまとめる。学生の英語能力については集団内におけるばらつきが大きいと感じており、一定レベルでの理解度を保ちながら講義を進めることが難しい。学生の英語能力のばらつきは、表5（本プログラムの各コースにおける学生の成績）からも窺える。その一方で、プロジェクトの進行に伴い、学生の理解度（トピックの理解、調査研究の準備、調査のまとめとアウトプット）が上がっていることが実感できた。また、このプロジェクトにおいて実践的な英語能力を向上させるために必要なこととして、(i) トピックに関して理解を深める、(ii) プロジェクトの一連のプロセス（事前学習、フィールドワーク、調査のとりまとめ、プレゼンテーション）を把握する、(iii) プレゼンテーションにいたる学習過程で何をすべきかを理解しておく、などを指摘していた。来年度以降の事前準備講座では、分野横断型研究プロジェクトの内容に対応した講義を行うことでより効果的な学習が現地で行えるように配慮する予定である。

表5 本プログラムの各コースにおける学生の成績評価（平均値と変動係数）

Course Name	Grade Point Average Scale 5.0	Coefficient of Variation
Pronunciation and Listening	4.20	0.12
Program Lectures	3.36	0.29
Interdisciplinary Research Project	3.36	0.31
Hot Topics	3.47	0.28

4. プログラム関係者の評価及び今後の課題

平成23年度UC実習型・夏季短期プログラムでは、参加者全員が全てのプログラムを事故もなく予定通りに修了することができた。先に紹介したように、本プログラムは多くの新しい試みを組みこんだ野心的な短期プログラムである。そのため、実施の結果を待たなければ分からないこともいろいろとあった。本項では、本プログラムの実施により明らかとなった改善点について述べる。まず、京都大学からの参加者（学生）がクラスにおいて他大学からの参加者と交流する機会を設けることが必要であると考えられる。本プログラムが京都大学向けの専用プログラムとして実施されており、他大学の学生が参加していないことが原因である。今後、4つの授業のうちのいずれかについては、カリフォルニア大学デービス校エクステンションが既存の語学研修として実施しているクラスに組み込み、他大学からの語学研修生との交流が出来るようにする。さらに、参加者の英語運用能力に大きな差が見られるため、英語の運用能力に基づくクラス分けを行うことも検討している。但し、その実現にはプログラムの実施期間を延長する必要がある。この場合、滞在期間は3週間ではなく4週間で想定している。もう一つの改善点は滞在期間である。本プログラムは本学から出されたニーズに対してカスタマイズされており、語学研修とはいえ、全ての授業が学生の行う課外研修活動およびその成果報告をサポートするために総合的に企画・運営されている。この部分は双方ともに非常に評価している。その一方で、本来であれば約2カ月で実施する授業内容を3週間に凝縮しており、学生の負担が非常に大きくなった事が筆者の現地視察、学生の報告、UCデービスのスタッフのコメントから判明した。滞在スケジュールにある程度の余

裕を持たせる、過度な学習負担をさせないプログラムを編成するなどの工夫をすることが今後の課題として挙げられる。

5. 結語

本プログラムは「分野横断型のトピックスを用いた語学研修」と「フィールドワークを活用した分野横断型研究プロジェクト」を融合させた新しいタイプの短期派遣プログラムである。本プログラムの成果として以下の三点を挙げておきたい。1) 分野横断型の知識を用いた実践的なディスカッションやプレゼンテーションが行える程度の英語運用能力の養成、2) 国際的な場における行動力の発揮、3) 研究テーマに対して多面的に取り組む力の養成（学際的研究能力の基礎を養う）。このように、本プログラムはプロジェクトの目的である「グローバル社会で活躍できる人材、海外でリーダーシップを発揮できる人材の養成」に十分に寄与し得る。今後は、担当教員、現地講師、現地スタッフおよび学生のフィードバックをもとに改良を進め、当該プログラムのより一層の充実と普及につとめていきたい。

注

- (1) [1] は参考文献 (1) を示す。以下同様。
- (2) ワーキンググループに参加の教員（「平成 23 年度 UC Davis, Extension（米国）実習型・夏季短期留学プログラム報告書」を参照）
- (3) テーマの設定において、UC Davis 環境デザイン学科にて教鞭を執っていた京都大学大学院理学研究科所属の鈴木在乃講師の協力を得た。
- (4) 平成 23 年 6 月 25 日に実施された IELTS（アイエルツ / International English Language Testing System）は世界中で広く認められた英語運用能力試験である。日本ではブリティッシュカウンセルと財）日本英語検定協会が試験運営団体を行う。本学の学内実施にあたり、財）英語検定協会の助成により、学内試験の受験者を対象に事前対策講座を土曜日に 2 回開催した。
- (5) 京都大学国際交流推進機構副機構長、京都大学大学院工学研究科機械工学専攻群「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」実施責任者「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」での採択プログラム「国際的横断型アカデミア人材育成のための機械系工学教育研究プログラム」より、工学部物理工学科機械システム学コース・宇宙基礎工学コースからの 6 名の参加者への助成が行われた。

参考文献

- (1) 小林明 (2011) 「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流 第2号』日本学生支援機構
- (2) 鈴木在乃 (2001) 「ランドスケープ教育の風景 サステイナブル・コミュニティに学ぶ - カリフォルニア大学デービス校 -」『ランドスケープ研究 第65巻』, pp. 52-53
- (3) 榎木哲夫 (2011) 「平成 23 年度 UC Davis, Extension（米国）実習型・夏季短期留学プログラム報告書」京都大学国際交流推進機構, pp.9-11
- (4) 西川美香子 (2011) 「平成 23 年度 UC Davis, Extension（米国）実習型・夏季短期留学プログラム報告書」京都大学国際交流推進機構, pp.13-15, pp.16-21
- (5) Mikako Nishikawa (2011) *Kyoto University English For Science and Technology Interdisciplinary Research Program*, August 15 -September 2, 2011, Program Report, UC Davis Extension, pp.4-9.

参考資料

- (1) 日本学生支援機構 平成 23 年度留学生交流支援制度（短期派遣）募集要領
- (2) 短期留学に関する意識調査, 2011 年 4 月 21 日, 交換留学説明会 於 京都大学
- (3) U.S. News “Best Colleges Rankings”, <http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges/university-of-california-davis-110644/overall-rankings>
- (4) UC 実習型・夏季短期プログラム（評価基準）

謝辞

第一回 UC 実習型・夏季短期派遣プログラムが企画され、無事に遂行することが出来たのは企画、運営、実施のために熱心にご指導およびご協力いただきました諸先生方および職員の皆様のお陰です。心から感謝の意と御礼を申し上げたく、謝辞といたします。

（京都大学国際交流推進機構国際企画連携部門・特定助教）

Developing English Competency through a Fieldwork-Oriented Study Abroad Program: English for Science and Technology Interdisciplinary Research Program at UC Davis Extension

Mikako Nishikawa

Abstract

This paper examines the customized interdisciplinary research program developed by the University of California Davis Extension for Kyoto University students. Twenty-two students participated in a three-week intensive program, which was designed to improve English proficiency, critical thinking, and academic skills through diverse activities in and out of the classroom. Interdisciplinary research project groups proposed, discussed and decided on three major areas of inquiry to explore. Through reading, research, and planning the groups gathered information related to their areas of inquiry. The program featured eighteen on-site visits and three program lectures that took place in the Davis community and greater Bay Area, where small groups were able to conduct their own research work. Information gathered from on-site visits was combined with key points identified through reading and research, and incorporated into the final group presentations. Through these presentations, students developed confidence and improved their oral communication skills. Students learned how to make effective oral and visual presentations, and how to apply verbal and non-verbal public speaking techniques. This paper describes how this program was designed, as well as their critical thinking and interdisciplinary communication skills.

(G30 Assistant Professor, The Organization for the Promotion of the International Relations,
Kyoto University)

